——蟹江博士の遺稿保存を託さる——

このほど，蟹江義丸氏の遺族から，博士の名著「孔子研究」の原稿をはじめ，幾多の論文原稿，校正刷り，論文の掲載された当時の雑誌，ノート，メモ等を，人文科学研究所島田助教授を通じて，本館に保存方が依頼された。蟹江博士は，今から60年も前になくなつた方なので御存知でない方も多いと思われるので，ここにその略歴を紹介する。

博士は，明治5年富山に生れ，同27年東京帝国大学哲学科に入学，同30年7月に卒業した。生来の蒲柳の質と，日夜の勉学がたたつて，早くから結核におかされ，明治30年に京都で静養しつつ，真宗大学の講師をつとめたこともある。同31年，病勢の小康を得て帰京し，ただちに東大大学院生となり，かたわら，早稲田専門学校に教弁をとつた。早くから祖父基徳氏の影響を受けて，東洋倫理思想の研究に志し，大学院生となるにおよんで，孔子の哲学思想研究に没頭した。この間にあらわされた「孔子研究」は，博引傍証，しかもよく自説をのべた，まれに見る名著といわれ，これによつて文学博士となつた。

この論文については，本学の貝塚茂樹教授も高く評価され，教授の著書「孔子」（岩波新書65）に次のように紹介されている。

「蟹江博士の『孔子研究』は明治時代において，従来の和漢の研究を集大成した名著であつた。その学術的価値は，今でも決して落ちない」と。

この「孔子研究」の他，日本の哲学研究史に名をつらねる井上哲次郎，深作安文，藤井健次郎等と協力して，当時の学界に大きく貢献した書物をいくつも作りだした。大小の論文は，「哲学雑誌」「東洋哲学」「倫理界」その他の雑誌に数多く掲載された。明治33年東京高等師範学校の教授となつたが，宿病は次第につのり，同36年より沼津の地に静養した。しかし病中なお勉学をやめず，

「星月のめぐりめぐりて止らぬ心を巳が心ともがな」

と詠じつつ明治37年6月になくなつた。年僅かに33。

今般寄せられた遺稿類の中には，上記の論文原稿のほかに，博士が活躍中より交友した人々で，後に有数の学者となつた人々の私信が多く含まれており，博士の人柄とともに，忘れられようとしている明治時代の，特に気鋭の学者達の生活，風潮を伺い知るよすがともなるので，下にこれら私信の発信人を列挙する。

姉崎正治，星野　恒，深作安文，藤岡勝二，紀平正美，岸本能武太，桑木厳翼，松本亦太郎，諸橋轍次，元良勇次郎，中島力造，南日恒太郎，岡田正之，小西重直，田部隆次，高島平三郎，建部遯吾，得能　文，友枝高彦，塚原政治，綱島栄一郎（号：梁川），宇野哲人，内田銀蔵，吉田賢竜，吉田熊次。

——本学雑誌目録出来る——

京都大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1965　354 P.

2月に刊行されたこの目録は，京都大学所蔵雑誌のうち欧文で書かれた自然科学に関するもの5238種を収録したものである。この種の目録は昭和18年に刊行されたまゝで，その後は期待されながらも種々の事情で出版されなかった。今回の出版は一昨年文部省から，全国学術雑誌総合目録（未刊行）を編さんするために調査を依頼されたさいに，各部局図書掛の協力によって収集したカード目録を原稿として編さんしたものである。

長らく日の目を見なかったこれらのカードから急に編さんしたために，記述様式が不統一であったり，排列が前後したり，ロシア語の飜字が ISO (International Organization for Standarization) に従ったものもあれば，ALA (American Library Association) によったものもある。また行の末尾のシラブルの切り方なども，紙面の節約のため機械的に切っているので見苦しい点も少くない。